

「精神科身体合併症マニュアル」 精神疾患と身体疾患を併せ持つ患者の診療と管理

評者 澤 温 医療法人北斗会さわ病院院長

単科の精神科病院で最も頭を痛めるのが精神障害者の身体合併症である。特にアメリカに始まり日本でも最近みられる訴訟社会では、精神科救急の入り口で身体合併症のある患者を断ることが多い。

また精神科病院に入院中の患者の身体合併症、特に急変にはなかなかハード・ソフトとも対応が十分でなく、また精神障害者という偏見もあってすぐ受け入れてくれる専門の病院もない。急変でなくても高齢化に伴う身体疾患や、三大死因になる癌を始めとする疾患、生活習慣病(を合併している精神障害者に関して)などは、なかなか入院治療を受けてくれないところが多い。

本書はこのような背景の中で、国家公務員等共済組合連合会立川病院のMPU(Medical Psychiatric Unit)グループの人々の挑戦である教科書といえるものであろう。立川病院は筆者も1973年から2年勤め、その後2年は監修者の野村教授も勤められたが、ともに当時の部長の松平順一先生のもとで教えを受けた。当時はまだ東京都が1981年に始めた「精神科患者身体合併症医療事業」以前であったので、カオスの状況での挑戦であった。野村教授は立川病院を辞められて藤田保健衛生大学で助教授として活躍された後、再び現場の仕事をと立川病院に戻られ、松平部長がアメリカではMPUというところで精神科医が身体科も診るという情報を示され、野村教授がそれを自ら挑戦して行い、日本で精神疾患と身体疾患を同時に診るMPUを広め、また本書の編集者の本田先生たちが育つ基礎を作られた。聞くところでは、本田先生は身体救急のご経験を持ちながらこの分野に入られたので、怖いものなしである。それまでの知識と実際MPUで実践してこられた事例から得た、まさに「精神疾患と身体疾患を併せ持つ患者の診察と管理」について440ページ、B6変型判のコンパクトな本にここまで書くかというほどの内容がある。

I. 総論では特にMPUでの精神科身体合併症の特殊性や対応の特徴に始まり、患者の受診経路や搬送の問題、診察、鎮静、術後管理、身体疾患や身体状況に応じ

野村 総一郎(監修)、本田 明(編)、定価 4,725 円(本体 4,500 円 + 税 5%) [ISBN978-4-260-00605-7] 医学書院刊、2008



た向精神薬の使い方が示され、精神科身体合併症の救命救急治療、精神科身体合併症管理で行われることのある手技・治療は図入りで記載されている。II. 各論では(1)各科合併症の治療・管理として内科各科はもちろん、泌尿器科、整形外科、耳鼻科・眼科、さらに産婦人科にまで精神障害との関係を踏まえて記載されている。II. 各論(2)精神科と関連の深い身体合併症、身体疾患に起因する精神症状としては、向精神薬による重篤な副作用について、また急性中毒、水中毒、けいれん発作などについても述べられている。

これほどの内容であれば、おそらくA4判で同じくらいのページの本があって、その要約本 synopsis となる内容であろう。ただ、監修者の野村教授とお話した時、精神科医はGPの知識を持って全体を理解し、必要なときには専門医へ遅れずに依頼することが必要だと言われたのが印象的であった。まさに精神科医が身体疾患の診断と治療について、精神障害者ゆえの特徴を含めて知識を深めなければならないものの、最初に述べたように、現代のような訴訟社会ではあるところで専門医に回さねばならないというジレンマがあるのであろう。特に新臨床研修システムで初期研修を終え、一応身体疾患も診られると思って精神科医になった医師には、このことを踏まえて勉強してほしいものである。

最後に、最近のように総合病院での精神科がどんどん縮小していく中、ぜひこのようなMPUが広がってほしいと思うが、単科の精神科病院での緊急を要する身体合併症については、東京都でも明確なシステムにはなっていない。精神科救急の現場ではこの点への対応システムの構築を願っており、本書の改訂版の出る時にはどこかで始まってほしいと願っている。